

市政だよりくれ 12

令和4年
(2022)
11月10日発行
vol. 862

誰もが安心して暮らせるまちへ



『ぼけますから、よろしくお願ひします。』

自身の体験から、認知症をテーマにしたドキュメンタリー映画『ぼけますから、よろしくお願ひします。』で知られる信友直子さん。認知症になったお母さんとの体験談を聞きました。

電話で感じた認知症のサイン

私の母はその日にあったことを面白おかしく話すのが得意な人で、離れて暮らすお互いの近況報告を電話でするのが毎日の日課でした。ある時、内容が前日と全く同じものだったので、「その話のオチ知ってるよ、昨日同じ話してくれたじゃん」と返したところ、電話口の向こうで、母がはっと息をのむ気配を感じたんです。まるで隠していたことがばれたような。心配になり呉に帰ると、りんごが山積みになっているのに、りんごを買いに出かけた母の姿。認知症に気付けたきっかけでした。

それから、認知症の母と、老老介護をする父の物語を記録していく日々が始まったんです。



▲おいしいコーヒーを入れてくれたお父さんの信友 良則さんはなんと102歳!!

母ももっと話しておきたかった

平成30年9月、母は脳梗塞で倒れて入院することに。再度、同年12月に脳梗塞が見つかり、療養型病院に転院することになりましたが、一つ条件がありました。それは延命治療の一つである「胃ろう」を作ること。

母の性格からすると、元気なうちに話をしていけば「延命治療なんかしてほしくない」と言うはず。しかし、私と父の気持ちを優先し、胃ろうを選択しました。母が認知症になる前に、延命治療について、母の意思を聞いておくべきでした。前もって本人の意思確認などしておく「人生会議」(*)の取り組みがもっと広まればいいですね。

胸に響いた父の言葉

認知症になった母は、「なんで私はおかしくなったんじゃないか」と、最後まで悩んでいました。そんな母に、父は「病気じゃけん仕方ないよ。覚えとかんといけんことがあったらすぐわしに言ひんさい。信友家は2人おるんじゃけえ、わしが覚えとって教えてあげるけえ。」と決して嘘を言わず、母の苦しみを和らげるような優しい言葉をかけていました。

そこには、お互いを思いやる、夫婦の固い絆があったように感じました。



ドキュメンタリー映画監督
のぶとも なおこ
信友 直子 さん

※ ~人生会議とは~

もしもの時のために、自分が希望する医療やケアなどについて、前もって考え、家族や医療者などと繰り返し話し合い、共有すること。



映画『ぼけますから、よろしくお願ひします。』

信友さんが、呉市で暮らす認知症の母(当時80代)と、老老介護をする父(当時90代)の姿を記録したドキュメンタリー映画。

現在、1作目のその後と、母の看取りまでを映した、続編映画「ぼけますから、よろしくお願ひします。~おかえり お母さん~」が公開中。

いろいろ
「人生の彩ノート」や「私の心づもり」で人生会議をしてみませんかいろいろ
「人生の彩ノート」

「人生の彩ノート」は、これまでの人生を振り返りつつ、今後の人生をより良く生きるための想いをつづるノートです。



「私の心づもり」

人生会議のすすめ方などを詳しく説明しています。ぜひ「人生の彩ノート」と一緒に活用してください。

※「人生の彩ノート」・「私の心づもり」配布場所… 市役所 1階高齢者支援課、各市民センター、市内医療機関、市内保険薬局